

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.28
52歳会社員
闘病の始まり

最近よく、しゃべっていることが聞き取りにくいと言われていました。病院に担ぎ込まれる1週間は時々唇の右端から意味なく涎が垂れることがありました。なんかお茶碗を重く感じていたし変だなとは思っていました。普段普通に持っているお茶碗が何でこんなに重いのか？俺も年取ったのかな～。最近、残業続きで疲れているんだ。きっとそうに決まっている。体調の変化を大したことはない無理に自分に言い聞かせていました。後2週間頑張れば、今の仕事も一区切りつくし週末も少しは休めるかな～なんて、俺も年だからちゃんとメンテしとかなないと、今の仕事に区切りをつけたら、ちゃんと人間ドックにいかないと。そんな事をのんびり考えていました。これが、まさかこんな大病の前兆だったとは思ってもよかったです。

私は52歳、とある会社の開発事

業部に勤めていました山部 聡と申します。あの時、あの瞬間としか言いようがありません。今でもトラウマになってしまっていますが、急に左手が重くなり、身体を支えることもできなくなりました。頭の中は急に霧がかかったようで、その直前、仕事で計算をしていたのですが、数字が渦巻いて、同じところを堂々巡りして、とにかく自分で考えているのに考えがまとまらなくなったんですよね。そうこうするうちに考えているのだということすら分からなくなっていました。今から思えばほんの数分だったと思うのですが、自分の中では一体何十年の出来事かと思うくらいに長く感じていました。

それから数週間が過ぎ、気が付けば病院のベッドにいたわけですが、左手を動かそうとしても動きません。なんで手がこんなに重いのか？左腕っていったい何kgあるんだろう、足だっとなかなか動いてくれません。この窮状を周りの人に訴えようとしても言葉にならないのです。一生懸命しゃべっても言葉にならない野獣のような音を発するだけ。どうなっちゃったんだろう。これが、私のこれから始まる闘病生活の始まりでした。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村 陽一